

# 研究結果報告書

## 日本語とインドネシア語との可能表現の対照研究

氏名：ステディ・デディ

所属： インドネシア教育大学言語文学教育学部日本語教育学科  
(インドネシア教育大学大学院日本語教育プログラム)

職名： 准教授

本研究は日本語の可能表現とインドネシア語の可能表現との類似点・相違点を明らかにしようとしたものである。両言語における可能表現の類似点・相違点については、(1)元の能動文（対応する能動文）、(2)構造上（統語的機能・統語的範疇・意味役割）、(3)意味、さらに(4)「Nができる」と「bisa N」の特徴という観点から分析を行った。

日本語の可能表現は、「(ら)れる」、「～ことができる」、「～得る（える・うる）、～かねる」という形式で表現される。また、「わかる」などのような動詞そのものが可能の意味を表わすものもある。意味用法上では、「能力可能」と「状況可能」の二つに分かれる。一方、インドネシア語の可能表現は、{bisa～, dapat～, mampu～, sanggup～}のような可能・能力を表わす副詞的な言葉を、動詞の前に置いたり、{ter-V}という接頭辞を動詞基本形の前につけたりして表わされる。これらの意味・用法は、日本語の可能表現に比べて、より使用頻度が高く生産的である。つまり、日本語では可能表現で表さない文でも、インドネシア語の文に訳した場合、可能表現になる傾向が強いと言える。

両言語における可能表現の類似点として、まず、(1)元の能動文は自動詞文か他動詞文であるが、それらの述語動詞は意思的動作か意志的变化動詞に限られる。例えば、「読む(membaca)・行く(pergi)」は意思的動作であり、「結婚する(menikah)」は意志的瞬間動詞かつ変化動詞であるため、可能文の述語になれるが、「死ぬ(mati)」のような動詞は無意思的動詞なので、可能文の述語にはなれないということが明らかにになっている。

次に、(2)構造上（統語的機能・統語的範疇・意味役割）の三つの観点から、分析を行っている。統語的機能とは、可能文の主語、目的語（補語）、述語のことを示すが、統語的範疇とは、それぞれの主語、目的語、補語のところに取り入れる言葉は品詞分類（下位分類）によってどのような言葉なのかを表す。さらに、述語のところによってどのような動詞が来るかを、動作動詞、変化動詞、状態動詞、さらに意志動詞か無意志動詞によって、分析をしている。その結果、以下のようなことがわかった。

自動詞文からの可能文は、日本語の可能文を「太郎(NP1)が海(NP2)で泳げる(V-int)」と「太郎(NP1)には海(NP2)で泳げる(V-intr)」に、インドネシア語の可能文を「Tarou (NP1) bisa berenang (V-int) di laut (NP2).」と「Kalau Taro (NP1) bisa berenang (V-int) di laut (NP2).」に、二つのタイプに分けられる。それぞれ、統語的機能（主語(NP1)・補語(NP2)・述語(V) 3つの項から成ること）、統語的範疇（NP1(名詞句1)-----NP2(名詞

句 2)----V(動詞句)の 3つの要素から成ること)、意味役割(動作主(A)か経験者(E)---場所(L)---状態動詞から成ること)という観点から見れば、日本語もインドネシア語も同じだとわかった。また、他動詞文からなる両言語の可能文も、統語的機能・統語的範疇・意味役割も同じである。しかし、「わたしはこの漢字が読める」を「この漢字が読める」に変えて、主語が省略された場合は、インドネシア語では、(i) Bisa membaca kanji「この漢字が読める」のような能動体の可能動詞(active potential)と、(ii) Kanji ini bisa dibaca「\*この漢字が読められる(読まれることができる)」のような受動体の可能動詞(passive potential)になっている。つまり、可能文の主語が省略された場合、インドネシア語では、可能の能動体と可能の受動体の二つの表現(形)になっており、体分裂(divergen)となると言える。

それから、(3)「できる」と「bisa」の意味は、(a)生まれつきの能力、(b)練習・訓練上の能力、(c)状況可能、(d)自然現象の生起、(e)もの・道具の性能という五つの意味に分けられることで、「できる」と「bisa」の類似点だと考えられる。

最後に、(4)「Nができる」と「bisa N」のNは、(a)言語名、スポーツ名、楽器名、曲名に限られ、(b)買い物などのような名詞動詞の場合はインドネシア語では「bisa-V」となることが明らかになった。これは、「できる」と「bisa」の相違点だと考えられる。

今後の課題として、本研究の成果を日本語教育に生かして、可能表現を教えるための説明書を目指していく。また、自動詞で表わす両言語における可能表現の研究をさらに続けていきたいと思う。

研究の公表について

<p>口頭発表1 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)</p> <p>題名 : 『日本語の可能表現——統語論的の観点から——』</p> <p>発表者名 : Dedi Sutedi (デディ・ステディ)</p> <p>会議名 : インドネシア教育学会の大会</p> <p>日時 : 2017年8月25-26日</p> <p>場所等 : Brawijaya University, Malang INDONESIA</p>
<p>口頭発表2 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)</p> <p>題名 : 『インドネシア語から見た日本語の可能表現の意味の分類』</p> <p>発表者名 : Dedi Sutedi (デディ・ステディ)</p> <p>会議名 : インドネシア教育学会の大会</p> <p>日時 : 2017年12月8日</p> <p>場所等 : Muhamadiyah University, Yogyakarta INDONESIA</p>
<p>口頭発表3 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)</p> <p>題名 : 『日本語の可能表現とインドネシア語の可能表現との対照研究』 ——「Nができる」と「bisa-N」を中心に——</p> <p>発表者名 : Dedi Sutedi (デディ・ステディ)</p> <p>会議名 : 第二回日本語教育・日本語学の国際セミナー</p> <p>日時 : 2018年7月21日(土)</p> <p>場所等 : Indonesia University of Education, Bandung</p>
<p>口頭発表4 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)</p> <p>題名 : 『日本語とインドネシア語における可能表現の対照研究』</p> <p>発表者名 : Dedi Sutedi (デディ・ステディ)</p> <p>会議名 : 第三回日金沢大学とインドネシア教育大学の共同研究会 : 『日本語学・日本語教育大会』</p> <p>日時 : 2018年9月14日</p> <p>場所等 : 金沢大学人間社会研究域 歴史言語文化学系人間社会学域 国際学類 日本学・日本語教育</p>
<p>論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)</p> <p>題名 : Contrastive Analysis of 'N ga dekiru' and 'bisa N'</p> <p>著者名 : Dedi Sutedi</p> <p>出版社 : Humaniora</p> <p>発行時期等 : 2019年(予定)</p>
<p>論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)</p> <p>題名 : Contrastive Analysis of Japanese and Indonesia Potential Expressions</p> <p>著者名 : Dedi Sutedi</p> <p>出版社 : Indonesia Journal of Applied Linguistic</p> <p>発行時期等 : 2019年(予定)</p>